常葉大学造形学部
研究紀要　第 17 号　2018

夏池　篤
NATSUIKE Atsushi

地域と連携した展覧会の中で、その環境から生まれた造形作品

In the exhibition in cooperaton with the area , sculpture influenced by the factors in the environment..

キーワード：
環境
彫刻
地域
自然
歴史

＜抄録＞
自らの生活の場に近い地域で開催された二つの展覧会 (アートイベント）において、各々の環境を要素として生かした作品を住民の協力を得て制作したプロセスの紹介

生命の樹
大　き　さ：約 h 120 × w 810 × d 826 cm
素　　材：茶ノ木、LED 蛍光灯、ic 基盤、100v 電源 等
発　　表：かけがわ茶エンナーレ (日坂地区・藤文）　2017 年 10 月 20 日～ 11 月 19 日

森のコースター2
大　き　さ：約 h 800 × w 1700 × d 2500cm
素　　材：木、ダボ、角型フランジユニット、鉄棒
発　　表：無人駅の芸術祭／大井川　2018 年 3 月 9 日～ 25 日

2017 年度、地域と強く結びついた町おこしの展覧会に参加する機会があった。一つは掛川市の主催する「かけがわ茶エンナーレ」(2017 年 10 月 20 日～ 11 月 19 日) で今回が初回となる。他の地域で多く開催されるアートによる町おこしの手法を用いてビエンナーレ、トリエンナーレ形式の展覧会をこの掛川でも開催したいという市役所と NPO 法人「掛川の現代美術研究会」（注 1 ）を中心とした地域住民の強い要望から始まっている。

掛川の「現代アート茶会」（注 2 ）を通して以前よりこの街のアートに関わっている山口裕美氏を総合ディレクターとし､この地域の特産物であるお茶を中心に、食をテーマとした企画となっている。掛川全域を対象とし、主な開催地区が 8 か所に絞られている。著者は隣町にアトリエを構えていることから、開催 9 か月前に東山・日坂地区の地域ディレクターとしての依頼があり、同時に出品作家としても参加している。

日坂地区には江戸時代から続く旅籠等の建物が 3 軒残っている。それに加えて今は公園となった本陣跡と地域で製茶業を営む山英本社倉庫、また東山地区では壮大な茶畑が見渡せる場が展示場として選ばれている。この空間を生かした展示ができる静岡と関わりのある 10 人の作家（今井瑾郎、大杉弘子、岡本高幸、田中俊之、夏池篤、松野崇、三上俊希、山本浩二、渡辺英司、Seo Sung Bong）に参加を依頼した。

筆者は江戸末期の商家で明治の初めには初代郵便局となっている「藤文」を会場とした。作品は今回の展覧会のテーマであるお茶を素材として考えた。お茶は様々な表情を持っており、喫茶による味覚・嗅覚に関わるものから、視覚的には丘陵を覆い伸び広がる緑の茶畑が静岡の人であれば誰もが思い浮かぶ光景であろう。著者の場合は、会場を視察する中で目にしたものに、植え替えのために茶ノ木が大量に抜き取られ放置された光景があった。葉を失った枝は枯れ果て白骨のようであったが、その枝の形態にはフラクタルに広がる神経繊維のように限りなく続く生命を感じた。それを 100 年以上の歴史をはぐくんできた家屋の暗闇の中に並べ、点滅する光の中で見せることで、歴史を遡り遥か昔の生命の起源にまで思いを馳せてもらう作品とした。

もう一つの展覧会が、「unmanned　無人駅の芸術祭／大井川」(2018 年 3 月 9 日～ 25 日) である。こちらは第 2 回となり主催は NPO 法人クロスメディアしまだと静岡県文化プログラム推進委員会である。大井川鉄道の代官町駅から川根温泉笹間渡駅までの無人駅 8 駅を会場とした 8 作家 (うち 1 グループ) による展覧会である。第 1 回は地元の作家を中心としたものであったが、今回は地元 4 名県外からの参加者 4 名という構成である。

作品「森のコースター 2」は 1999 年秋野不矩美術館での個展の際にその前庭に設置した作品「森のジェットコースター」の続編である。今回と同様に森に隣接した場での展示ということで、人間だけでなくそこに住む動物を意識した展示であった。前回の作品は木製レールのみでトロッコ部分はなかった。昼には人間が作品を鑑賞し、夜にはそのコースで動物が遊ぶという想定であった。今回は、このプロジェクトの最終駅となる川根温泉笹間渡駅を会場として選んだ。駅で降りた乗客が、トロッコに乗って更に森の奥まで旅するといったイメージである。前回の作品がダイナミックに旋回する線路の形態が見どころであるのに対し、無人駅の作品は、一部山に沿って 8 mの高さまで持ち上げた部分を除けば平坦な路線で、鑑賞者がトロッコを動かせる構造となっている。制作はトロッコを押し脱輪がないことを確認しながらの作業となり、

夢中になって押しているうちに、幼い頃木のおもちゃを動かして遊んでいた時の感覚が蘇ってきた。近年、新幹線のような高速鉄道によるスピードだけを競うことだけが話題になっているが、この感覚を鑑賞者と共有することで、大井川鉄道のようなのんびりと旅することの魅力を知ってもらう機会になればと思う。

この 2 つの展覧会はその規模に置いては異なっているが、作品制作ではその現場の持っている要素に目を向けることから作品の発想が生まれ、作業過程でも地域の方の協力を得ることで短い準備期間の中で作品を完成させることができた。

「かけがわ茶エンナーレ」では、植え替えの茶ノ木を提供いただき、伐根から材料の運搬まで協力いただいた。展示会場では、作品管理はもとより湯茶等の接待まで地元の人たちのサービスがあった。他の作家で、地域の伝説を元に制作した作品があったが、その内容を会場で地域のボランティアの方が説明してくれたことで、そのコンセプトが具体的になり、より深い鑑賞が実現するといったケースもあった。

無人駅展では住民から河川敷で伐採予定の立ち木があることの連絡を受け、現場で木の形を見ながら作品のイメージを考慮しての伐採が可能となった。木の運搬も地元の方が快く引き受けてくださったため作品に集中することができ、縦 30m 横 17m 高さ 8 mの大作を 10 日ほどで完成させることができた。

県外からの作家は、空き家となっている共同住宅に寝泊まりして制作を行った。その中で時々行われる作家と地元の人たちとの交流会は、村の宴会さながらで作家と地域の人たちとの距離がなくなっていき、地域で制作することの楽しさと意義を知ることができた。

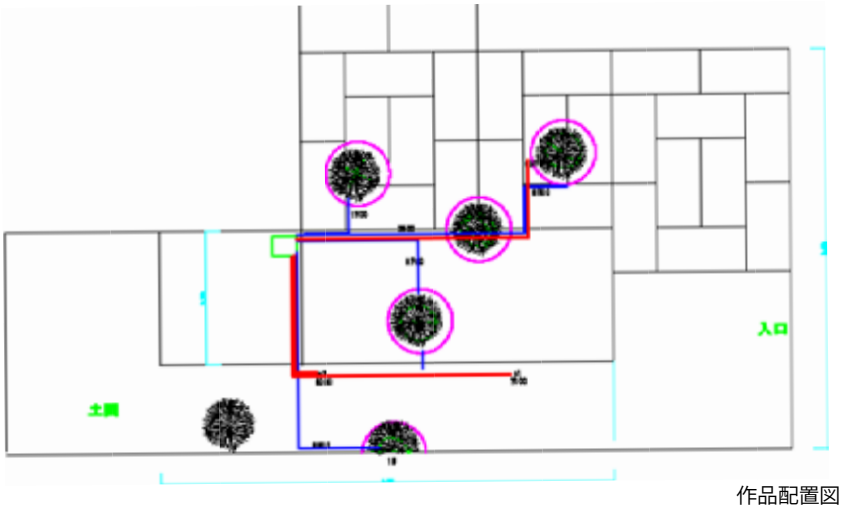
注 1． この法人は、掛川市内外の人々に対して、まちづくりの推進、学術、文化、芸術の振興、経済活動の活性化及びこれらの活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助に関する事業を行い、掛川のまちづくりと市民の豊かな心の醸成に寄与することを目的とする。　代表山本和子 (内閣府 NPO 法人ポータルサイトより）

注 2．NPO 法人掛川の現代美術研究会が、「掛川現代アートプロジェクト」の一環として 2007 年から始めたイベント。掛川城二の丸茶室において現代美術家による茶道具の提供とトークイベント等による夜の茶会。（https://genbiken.jimdo.com/ 参照）

「かけがわ茶エンナーレ」展示会場（日坂地区・藤文）

藤文外観

藤文室内



作品配置図

生命の核

「unmanned 無人駅の芸術祭／大井川」（川根温泉笹間渡駅）

川根温泉笹間渡駅舎

プラットホーム

森のコースター２